

令和5年度・第2回岐阜県先端科学技術体験センター 指定管理評価員会議議事要旨

日時：令和6年1月19日（金）

10：30～11：30

場所：岐阜県先端科学技術体験センター会議室

■出席者：14名（敬称略）

評価員：岡田 優子、高橋 信一、三宅 崇 [定数：4名]

※工藤恵美子氏は欠席。

指定管理者：河石 勇、森井 映美子（株式会社トータルメディア開発研究所）

五ヶ山 淳、水谷 幸次（中電クラビス株式会社）

三浦 秀輝、安江 進、田代 学、和田沙欧里（館職員）

岐阜県：高井 哲也、蒲 祐輔、馬田 勝利（文化伝承課）

■議題：令和6年度の事業計画について

○開会

○挨拶

文化伝承課 高井課長

指定管理者 三浦館長

河石部長 より挨拶

○館内案内

指定管理者（安江副館長）より案内

○令和6年度事業計画

指定管理者（安江副館長）よりパワーポイント資料にて説明

○質疑応答

高橋評価員：オンライン授業について、どのようなやり方を検討しているか教えてほしい。

田代(指定管理者)：まだ具体的な方向性は決まってないが、基本的には、こちらでやるのを見せるだけではなく、簡単な体験活動を1人1人にやっていただき、それをこちらの方でレクチャーするというやり方を考えている。

実際の理科の授業の中でSWが扱えるものとして、例えば温度による三態変化が考えられる。6年生の発電分野など、学校があまり道具を持っていないテーマについても、こちらから貸し出ししながら、使い方をオンラインで説明するというやり方を検討している。

三宅評価員：以前やっていた、参加者に材料を送って実施していたオンライン講座は今も実施しているか。今後も継続する予定か。

安江(指定管理者)：継続する方針であり、2月にも実施予定。

田代(指定管理者)：今年度は、加納西小の4年生の2クラスで、夏の星についてのオンライン

授業を実施し、大変好評であった。

岡田評価員：学校利用というのは、どのような範囲の学校を含むのか。

安江(指定管理者)：県外も含めた全ての学校が対象である。岐阜県が6~7割で、次点で愛知県、関西の学校の利用もある。

高橋評価員：中学校、高校の利用がどのくらい増えたかわかるか。

安江(指定管理者)：手元に資料がないので具体的な数字はお答えできないが、比率としては、これまでとそんなに変わってはいない。

三宅評価員：来館者の低年齢化が進んでいるので、高年齢層への利用促進という話があったが、具体的な計画はあるか。

田代(指定管理者)：来館者の平均年齢を高くするという訳ではなく、あらゆる世代に対して満足してもらえるようなメニューをそれぞれ用意したいと考えている。今までのチャレンジワークショップは、どちらかという、低年齢向けのメニューが多かったので、年に1~2つは、中学校、高校、大人の方も楽しめるようなチャレンジワークショップを用意して、SWは高年齢層の方でも楽しめるというところをアピールしていきたいと考えている。

三宅評価員：あくまでメインの対象は小学校であるということか。

田代(指定管理者)：その通りである。館全体としては、例えば未就学児や低学年向けのワクワクワークショップといった、幅広い年齢層ごとの受け皿を用意し、住み分けを明確にしながらやっていきたい。

岡田評価員：出張ワークショップはどういう内容が多いのか。サイエンスショー的なものが多いのか。

田代(指定管理者)：実験ショー的なものが半分で、あとは工作が多い。特に低学年向けの場合は工作の割合が多くなる。

高橋評価員：最近、液体を混ぜて二酸化炭素を発生させる実験で、瓶が爆発したという事故のニュースを見て、理科の先生の安全管理に対する知識が弱いのではと感じた。こういったケースは今後も起こることが予想される。例えば出張ワークショップで、学校でよくやる実験の中でも、安全管理が重要なものを取り上げ、生徒と先生が科学に対する知識だけでなく、安全管理についても学べるようなプログラムをやるのはどうか。あるいは上記内容の理科の先生向けの研修を、教育委員会と連携して開催するというのはどうか。

三浦(指定管理者)：先生向けの研修について、小中学校の理科部会が市教研という形で、総会を入れて年4回、会合を開いている。今年度、SWに来てもらって研修会を行ったのは、多治見市と瑞浪市の2市。先生との話の中でも、そのような話題が出たことはあるので、今後検討していきたい。

三宅評価員：サイエンスコミュニティ発展のための活動として、サイエンスカフェがあるが、そういった取組みはしないのか。

安江(指定管理者)：話は出たことがあるが、実施には至っていない。

三宅評価員：何か理由はあるのか。方向性の不一致とか費用面とか。

河石(指定管理者)：サイエンスカフェは都会で開くケースが多く、SWは立地的な問題があり、集客が難しいと感じる。現在、大学との連携を模索する中で、例えば

こちらから出向いて開催するとか、検討を進めていきたい。

高橋評価員：ファンクラブはいいアイデアだと思う。これまで来館者が多かったのは、リピーターが多かったからだと思う。それがコロナによって来館の足が途絶えてしまい、コロナ終息後も客足が戻りきっていない。1度来館されれば、以前のようにリピーターが戻ってきて、来館者数が元の状態に戻ると思う。まずは一度来てもらって、あとはファンクラブを通じて、リピーターになるように促していけたらよい。以前来館していた方をどう呼び戻すかというのが課題だと考える。

安江(指定管理者)：広報の充実や出張ワークショップでのPR等で、元の状態に少しでも早く戻せるようにしたい。

○評価員による講評

岡田評価員：1点目に、現場としては、SWに行きたいという思いはあるが、難しい面がある。例えば私の勤める美濃加茂市の小学校でいうと、今年は4年生4クラスが「科学の不思議」という約70万円の補助金を使って、SWに連れて行った。バス1台につき約8万円かかるので、4台で約32万円かかってしまう。その他には、3年生を岐阜市科学館に、別の補助金を使って6年生を名古屋市科学館に連れて行った。補助金が今後も継続されるかどうか不透明な状況の中で、保護者への負担をかけることもできず、非常に苦しい財政の中でやりくりをしている状況にあるため、来館者数が伸び悩んでいるのではないか。代わりに、SWに行けない分、子供たちに体験させてあげたいという思いから出張ワークショップが増えているのではないか。

教員の立場からすると、出張ワークショップは更に増やしていただくとありがたい。それに加え、実際の授業の中に入ってきてもらい、教室での出前授業みたいなことも、やってもらえるとありがたい。冒頭に実験の様子を見学したが、SWのように時間をかけて子供たちに試行させながらというのは、学校の授業だと時間と道具が限られてくるので難しい部分がある。出前授業やオンライン事業等を活用していけば、SWに行けなくても、子供たちの学びを充実させられると思う。

リピーターや科学好きな子を増やしていくのは勿論のこと、まだ科学の面白さに気づいてない子が沢山いて、保護者も、親自身や子供が科学に興味があればSWに連れて来るが、科学に興味がないとか、経済的にSWまで行くのが困難な場合もあると思うので、そういった方への科学の興味を持たせる入口の役目も担ってほしい。

2点目に、教員の研修について、今年度から教員の免許更新制度がなくなったため、各自で研修を受けなければならなくなり、各先生は、総合教育センターの研修を色々選択して受講している。教員向けの研修はこれまでもやっているとのことだが、一般の先生には難しい内容もあると感じたので、普段の理科の授業に生かせる科学ネタや実験等に関する研修があると、一般の先生でも受講される方は多いのではないかと思う。また小理研との連携の話もあったが、私たちの地区をはじめ、他の地区にも出向いてもらえるとありがたい。

三浦(指定管理者)：かつては下呂市の小理研に出向いたこともある。ぜひご相談いただければ幸いである。

高橋評価員：魅力的なプログラム等の開発に努力されている点は非常に素晴らしい。ワークショップも、新型コロナ対策の中で色々工夫したことが活かされて、出張ワークショップや学校利用の件数の増加に繋がっていると思う。課題は、コロナ前の状態にどう戻していくかである。来館者を増やすために、広報、オンライン事業、SNS等を活用して、誘客につながるような取組を継続して行ってほしい。また、数が伸びている出張ワークショップやオンライン事業から、来館に誘導できるような仕組みを作れたらいいと思う。

三宅評価員：大学では近年、成果の社会還元というのが主流となっており、その流れの中のアウトリーチ活動の一つとしてサイエンスカフェがある。大学側のニーズが社会還元という方面に広がっているのを感じたので、先ほどはそのような提案させてもらった。
来館者の低年齢化に歯止めをかけるという話の中で、高年齢層の方から口コミで広がっていくのは、いい流れだと思う。しかし、入館者数をコロナ禍前に戻すには、どうしても低年齢をターゲットにした方がやりやすい。高年齢層をターゲットにすると入館者数が伸びないし、かといって単純に数だけ増やしていけばいいのかという話でもない。入館者数の回復と来館者の低年齢化の解消というのは、目指す方向性が違うと思うので、そのあたりのバランスを考える必要がある。

○閉会